

# 「千葉氏を

# 語る」だより

令和元年度

第9号

発行・編集

千葉氏を語る会事務局

発行日

令和2年1月15日

今年もシンポジウム開催

例年のように今年も十一月三日文

化の日に本会恒例のシンポジウムが千葉県教育会館で開催されました。

今年のテーマは「千葉開府大治元年説を検証する」と題して四名の先生から講演を受けました。その中で今回は、長原巨先生の講演「土気と亥鼻はつながっていた」の概要を紹介します。

## 基調講演

加曾利貝塚博物館

長原 巨(考古学)

加曾利貝塚博物館で学芸員をしています。長原です。よろしくお願ひします。

加曾利貝塚勤務の者が、なぜこの場にいるのか不思議に思う方もいるか思いま

ます。加曾利貝塚博物館の学芸員は縄文時代の専門家と思われがちですが、私の専門は古墳時代で、お墓、石室の研究を行っています。

私は長く千葉市埋蔵文化財調査センターに勤務していたので、土気の調査に関わった経験があります。その頃に疑問に感じていたこと(土気が何故開発されたのか?)今から話をする内容につながっています。

「土気と猪鼻はつながっていた?」かもしれない成果があるのです。

歴史にはいろいろな分野があり、文献の中で全てが語りつくせるわけではありません。

考古学には、文字が残っていない点を補うという性格があり、今回はそこに焦点をあてるということになります。

土気と猪鼻がつながっていると感じたきっかけについて考えたいと思います。

そもそも、なぜ土気が開発されたのかは、発掘調査をしていると何となく見えてきます。情報は多岐にわたり、多すぎるので、私の専門である古墳、宗教施設、生産関係の施設、墨書土器などを選択してみました。

土気と猪鼻がどのようにつながっていたかを考える上では、その間にあるおゆみ野の調査成果、青葉の森の中にある荒久古墳と千葉寺の関係、猪鼻城跡の調査成果で古墳がみつかったので、それらを取り上げて説明したいと思います。

これらを説明する中で、土気と猪鼻がつながっていたことを示す直接的な証拠はありませんが、状況証拠を示したいと思います。

土気がなぜ開発されたのかということですが、土気は市域では新しく編入された場所で、元々は上総国に属していました。上総だったのに下総の猪鼻とどうしてつながっていたのかというのをこれから実証していこうというわけです。

律令時代の地域は、基本的に古墳時代の豪族領域が踏襲・反映されていることが多いと考える研究者は少なくありません。律令時代には、二国に分断されてしまいが、古墳時代にはつながりが

あつたと発掘調査成果からはいえそうなのです。土気は地勢的に考えると房総半島の首にあたります。上総丘陵と下総の台地の境の東側、太平洋側と東京湾側をつなぐ一番短い部分の結節点か土気です。今に比べると工事の道具や技術が乏しい中、なるべく楽して移動したいわけです。

高低差が少なく最短でつながるルートを選択するのが合理的で、それに気づいた古代人がいたわけです。

その意味で、土気の地は意識的に選ばれたのだと思います。

土気には分水界があります。北に鹿島川源流、南に村田川源流があり、土気の最高地点がそこにあたり、ここが最もポイントになる場所です。

江戸時代には、この間(分水界の部分)を土気往還が通ります。この事実が、私にとつての疑問の元にもなっています。

ここから、土気の遺跡群についての説明になります。

土気はものすごく多くの調査成果があるところです。

土気南遺跡群には三十二遺跡、昭和の森公園の造成に伴う昭和の森遺跡群が十一遺跡、土気東遺跡群は土気高校周辺やホキ美術館のあたりに

十二遺跡、千葉中央ゴルフ場遺跡群は東急セブンハンドレッドゴルフクラブの造成に伴う調査で五遺跡、土気緑の森工業団地遺跡群は県による調査で十九遺跡です。

土気南：昭和の森・土気東：中央ゴルフ場は、千葉市が調査を行ない、土気南遺跡群はバブル絶頂期だったこともあり、遺跡群全てを調査した貴重な遺跡群なので、発掘調査報告書八冊も刊行され、とても多くの成果が報告されています。

ただ、なぜこのような山の中にこのような成果が残されていたのかは不思議に思わざるを得ないわけです。

というのも、江戸から昭和前半まで、土気が大きく発展したことがないわけで、それ以前のものがあつたということは、何かしらの地勢的なメリットがあつたと思像できます。

中でも、私が担当した土気東遺跡群の調査では、古墳が多く調査され、この成果が今回のポイントになると思っています。

全てを説明すると大変なので、土気の埋蔵文化財の特徴をあげてみました。

縄文時代までは、縄文時代前半(早期)にある程度の成果がありますが、今回は取り上げません。

土気地域の開発が本格的になるのは、古墳時代中期以降、特に後期(六世紀代、西暦五百年代)に急に開発が進みます。なぜこの時期に開発が始まるのかという点は、この地域のみのことではなく全国的な傾向でもあります。

古代の流れの中で、西日本・畿内の情勢の中で、継体天皇(六世紀初頭)以降に急激に政治的なものが整備され、全国に畿内の力を広げていく時期があります。その中のある時期に土気地の利(土気の特性)に目を付けた古墳時代人がいたのだと思います。その方の出現以降に土気が発展したと思います。

奈良時代になると、宗教施設や大きな生産拠点が増え、平安時代になるとさらにその傾向が進みますが、十世紀には(我々が調査対象とする)遺跡がパタツとなくなることが、発掘調査で分かっています。

十一世紀以降、千葉氏とかかわる頃の成果はあまりありません。それ以前(十一世紀以前)には多くのことがあつた、そのことを今回紹介するわけです。

気になる土気の特徴があります。大規模な工業的な生産地でありながら、その生産に携わる人々の生活を支えるべき水田や畑を耕作する面積が少ないにもかかわらず、ムラが拡大すると

いう特徴があります。

これは、食糧生産を伴わない経済的なバックアップがあり、物が集まり拡散する物流の拠点の役割が土気の特徴だと思っています。

それでは、古墳、宗教施設、生産施設、墨書土器について説明します。

まずは、舟塚古墳です。

土気高校の校内にあつた古墳で、昭和三十九年(1964年)に県立農村青年研修所の増設に伴い早稲田大学が調査しました。前方後円墳で、二重の周溝がめぐり、後円部の真ん中あたりに複室構造の横穴式石室が見つかりました。石室を伴う前方後円墳は市内では少なく、おゆみ野の人形塚古墳くらいです。(実際には、猪鼻城跡で見つかった前方後円墳でも石室が見つかっています。訂正します。)

前方後円墳の形は、ある程度の実績と地位があり、中央(畿内)の大豪族や天皇系に連なる勢力との同盟関係というか、主従関係の中で造ることを許可された者が造ることができたと考えており、そのような古墳が土気の地に一基だけとはいえ造られたことは、地味な話ですが、重要なことです。また、この石室は軟質砂岩を載って積み上げるタイプの石室で、

主室・前室の複室構造、床にも砂岩が敷かれています。

このような石室はとも手が込んでいるもので、同じタイプのもはおゆみ野の人形塚古墳があり、千葉以外にも山武地域(芝山はにわ博物館周辺)にもあります。軟質砂岩の石室は、房総半島のどこにでもあるかというところではなく、山武・土気おゆみ野の他に猪鼻地域までの間(の台地上)にあります。

どこにでもあるものではなく地域の拠点となる場所にあるともいえます。

この石室の他には、木棺直葬や、別種の石材を使った箱式石棺などもあります。が、それらとは一線を画するのが特徴です。この古墳のもう一つの特徴は、出土した土器(須恵器)にあります。

古墳や石室の特徴からは、六世紀末頃と判断できますが、墳丘上で見つかった土器は七世紀後半のものなのです。つまり、一世紀後のものであり、出土状況からお供えされたものと判断できません。百年後の人々が祭祀を怠っていないことを示しています。子孫がこの地において祭り続けていたわけです。

舟塚古墳周辺の古墳は、分水界の間に密集していますし、東常楽台遺跡のものも円墳ですが石室があり、土気の地に二つの勢力が存在したと推定しています。

古代の道の起点には、墓(古墳など)がつくられることが少なくありません。また、古墳群と古墳群が重なっているかと判断できる道が推定できる場合も少なくありません。

そのセオリーにもついています。さらに、奈良から平安時代の墓域もこの近くに分布しています。つまり、古墳から平安時代までずっと墓が造られ続けた場所なのです。

その後(奈良時代の)小食土麿寺や荻生道遺跡などが造られます。小食土麿寺は、古墳群のすぐ脇にあり、墓さらに、奈良から平安時代の墓域もこの壇と寺域を画する溝が見つかっています。

古代においては、古墳を造らなくなつた後、古代寺院を造るということが、豪族層のステータスの一つになつていたようです。寺院建設に資金を投入することが出来る資力のある人々がいて、他からも力を集め、他者がお参りに来るような場所を整えることができるような象徴的な場所が小食土麿寺といえます。

小食土麿寺のあるこの地は上総国です。上総国分寺創建時の瓦も出土しているのです。八世紀中頃に造られた上総国分寺創建を支えた在地の郡司層(古墳時代以来の豪族)によつて造られた寺と考えて差し支えないと思います。

次に荻生道遺跡です。

県の指定史跡になつています。方形の溝に囲まれた同規模の二棟の掘立柱建物跡が並んで見つかったのが特徴です。

諸説ありますが、神殿のような、神社のようなものであるという説もあり、滋賀県の伊勢遺跡などでも見つかつており、一般の人々が住む家ではなく、特殊な用途の建物であるという点は、認めてもよいように思います。

小食土麿寺とあわせて宗教的な施設として考える向きもあります。

これらの遺跡に加え、舟塚古墳、それに伴う古墳群があり、発掘調査で確認されている奈良時代の道遺構があり、これら全てが土気往還の起点に集まるのは示唆的です。

土気往還は江戸時代の名称ですが、利用開始は奈良時代、さらに上がつて、古墳時代には空間として利用され始めていた、つまり、計画的に利用されていたと推定できそうです。

次に生産です。

南河原坂窯跡群です。あすみが丘プラザのすぐ近くです。粘土採掘坑・工房・窯跡・倉庫といった一連の施設が整った稀有の遺跡で、房総の一大工場群でした。出土瓦には、上総国分寺の瓦が含まれ、同じ瓦が出土する小食土麿寺と

密接な関係があつた遺跡といえます。土気は、墓があり、宗教施設があり、一大生産遺跡群がある都市(言い過ぎかもしれませんが)があつた場所ともいえます。

考古学的には、文字資料を見つけないことは少ないですが、房総半島は文字資料がよくみつかるところですし、土気も少なくありません。

「三枝」の墨書は、律令期の千葉郡三枝郷を示すものかもしれません。そのあたり(三枝郷あたり)と土気との間に関係があつたのかもしれませんが。「穴走」の「穴」は、鶏肉を得る人々を示す穴人部を表すかもしれません。

「丈忠」の「丈」は、丈部(長谷部)という軍事氏族を表すかもしれません。「日奉甲栄」の「日奉」は、日奉部(敏達天皇の時代に設置され、房総には、他田日奉部直「オサダヒマツリベノアタ

イ)を表すかもしれません。「伴「トモ」」は、身分。「殿原」の「殿」は殿上人のような高貴な人を表し、「殿」そのものの墨書が多くないことから、「殿原」を「特別な人がいる所」とも解釈でき、土気が「殿」がいるような場所とも解せます。「富主」は、「富を持った人」。「梨寺」「洪南寺」の寺は、もしかしたら小食土麿寺の当時の名前だったのかもしれませんが。

なお、「丈」の墨書はおゆみ野でも見つかつていたので、土気とおゆみ野が重なつていたことを示すのかもしれませんが。

「國厨」は、国の台所を示し(中央ゴルフ場遺跡群の中鹿子第一遺跡出土)、上総国府と関係があつたのかもしれない。

「小中村」は、大網白里市にある小字に「小中」があるのでそこを示すのかもしれませんが。「草前」の「草」は、土気が属していたと推定されている上総国の草野郷を示すのかもしれない。

簡単にまとめます。古墳時代は、黒ハギ遺跡という遺跡にはじまり、舟塚古墳などの古墳群が造られ、奈良時代の方形周溝状遺構へとつながります。

奈良時代は、荻生道遺跡、南河原坂窯跡群、小食土麿寺といった宗教生産遺跡が増加し、土気全体にムラが拡散します。

平安時代は、大規模な倉庫群や生産遺跡や宗教施設がさらに増えます。しかし、十世紀以降、この地から人がいなくなるという流れがあつたわけですね。

遺跡群の情報から推定できることの中でも、拡大することで起きる問題が重要です。いろんなものができるということ、集中して人が住み続けるわけですから、自然が大幅に

改変され、人口の増加が進みます。さらに、立地的に食糧生産に不向きな場所である土気の事情から、どこからか必要なもの(人口を維持するための食糧)を持つてこなければなりません。(安定的に)

また、以外に意識されていないこの中に、排泄物処理の問題があり、疫病の発生につながる大問題なので、古代ローマの為政者も課題に一つとしていたくらいのことなのです。

そういつたことが整備されない状態が続けば、住みにくくなるのだらうと思うのです。ですので、土気からは一時的に(十世紀末以降十一世紀代の間)人の痕跡がなくなるのではないかと私は推定しています。

ただ、そのことが十一世紀の土気(伝説の千葉氏)につながるかどうかはわかりません。

次におゆみ野です。三十九遺跡あります。色々な情報がありますが、古墳群についての扱います。

ここには約四百基の古墳や墓があり、その中の前方後円墳が人形塚古墳です。この古墳を中心に(端緒に)多くの古墳が造られますが、その中を(正確にはその東縁を)土気往還の前身と考えられる道が抜けています。

土気で石室の話をしました。土気だけでなくおゆみ野・猪鼻などにもあります。他にも多くの古墳が市内にはありますが集中している場所は限られています。

では、なぜこのような分布をするのか考えた時、相互に情報交換が確実に行われていたと考えた方が理解しやすいです。そのきっかけとなったのが石室墳(の存在ではないかと私は考えているのです)。

人形塚古墳は、二重周溝が盾形(長方形)ですが、土気の舟塚古墳は鍵穴形(の周溝)なので少し違いますが、複室構造で床に石が貼られる横穴式石室であることは同じです。

また、山武型の埴輪が人形塚古墳から見つかっています。

人形塚の名は、この埴輪がむかし見つかったことに由来します。

横芝光町の姫塚古墳出土の例とよく似たものが出土していて、石室と山武型埴輪を両方が持つのは偶然ではないと思います。

土気で“丈部”、おゆみ野でも“丈部”、山武でも同様の人がいたとする説もある中で、豪族の名前を記した墨書土器の存在からもつながりがあると思われる。猪鼻に一気に近づき、青葉の森にある

荒久「アラク」古墳についてです。

長辺二十メートルの方形をした古墳です。前方後円墳が造られなくなつた後に方墳が造られるのが奈良・飛鳥でのパターンです。

推古天皇や、用明天皇(聖徳太子の父親)の墓は、大方墳です。石舞台古墳も同じです。

蘇我氏系の人々が、方墳を採用することが多いという説を支持する人も少なくなく、私も同意するところがあります。これらの古墳が造られてしばらくたつてから荒久古墳は造られたのは何か示唆的と感じています。

さらに、墳丘の真ん中に石室が造られています。これも畿内的です。

多くの市内の石室墳は、南などに片寄つた石室をつくる傾向があります。

つまり、畿内の情報にかなり密に接していた方で、方墳を墳形に採用することを許可された方が葬られたと考えられます。この古墳(荒久古墳)が特異なところは、単独で造られていることです。

前の世代の方々の古墳が周辺に全くないのです。

このことは、七世紀終わり頃に新たにこの地に墓域を設定できたという意味で特異なのです。恐らくこの古墳の主は、土気からおゆみ

野を経て、猪鼻までの間で石室墳をつくっていた方々の盟主的な立場として最終的に荒久古墳を造つたのではないかと私は考えています。

この後、千葉寺が造られます。

荒久古墳の主の次の世代が八世紀第二四半期には千葉寺を建立しようです。土気から猪鼻までの間にいた小豪族が、集団として深く関与していたからこそ、大きな古代寺院建立が可能になつたと思つています。猪鼻城跡の調査(平成十四年度の千葉大医学部の研究棟建設に伴う調査)でも、長さ二十八メートル程の石室を持つ小さな前方後円墳が見つかっています。この古墳は、七天王塚の真ん中に位置します。

私は、以前から七天王塚そのものが古墳の再利用ではないかと思つていました。この調査以降、このあたりは前方後円墳を含む古墳群が密集していた場所と考えてよからうと思いはじめました。中世以降に古墳を再利用して塚群が造られたとも考えられます。

三号塚は、昨年度(2018年)に小規模な調査を行いました。が、旧いと判断できる情報を得ることができませんでした。ここまでのことをまとめてみました。

土気とおゆみ野と猪鼻の間には、幾つかの共通項があります。

前方後円墳があること、終末期(七世紀代)の方墳があること、有力なムラがあること、生産遺跡があること、数教施設があることなど当時としてまとまったまちのようなものがあつたようです。石室のみでも、同じような構造をもつた展開していることから、情報は共有されていたように思えます。これらのことをもつて、土気から猪鼻までがつながっていると私は考えたわけですが。

大網白里市の南麦台遺跡(千葉市の中央ゴルフ場遺跡群に隣接する)から、「下総国千葉郡千葉郷」と刻書された紡錘車(糸をつむぐ道具のおもり)がみつかっています。

土気と千葉郷はつながっていたと考えてよいと思います。

このような状況証拠では、古くは古墳時代後期六世紀から古墳でつながり、平安時代まではつながっていたといえるデータはありません。

ただ、それらは、長い歴史・時間幅の中の点的な情報を集めたらこのようにも解釈できただけで、100%実証できているわけではありません。

火のないところには煙は立ちませんので、必ず何か意味のあるつながりがあるのでしよう。

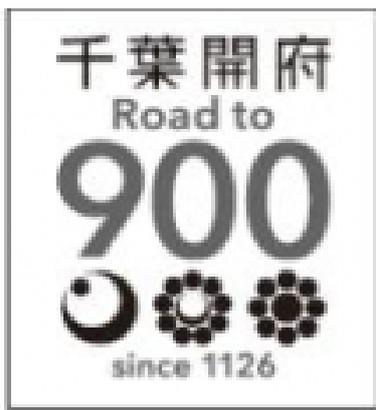
今後資料は増えるはずなので、根拠

になる成果がみつかったらよいなあと思います。

仁戸名あたりから猪鼻の間、千葉寺周辺を中心とする地域には、奈良時代の主要な遺跡が密集し、猪鼻につながっています。房総半島の中での猪鼻付近の重要性を表しているともいえるのではないかと思います。

古東海道の道筋を私は砂碓の上を走る旧房総往還に求めており、千葉神社付近に河曲駅があつた可能性も考えているので、そこに土気往還以前の古道がつながることは、合理的なことと思つています。

最後はかけ足となりましたが、これですの話は終わりとさせていただきます。ご静聴、ありがとうございます。



11月3日(日) 千葉歴史文化フォーラム  
**千葉開府  
大治元年説を検証する**

午後1時半～4時半  
千葉県教育会館 大ホール  
千葉市中央区中央 4-13-10  
Tel. 043-227-6141

資料代 一般 500円  
          会員 無料

講師  
峰岸 純夫 (歴史学)  
東京都立大学名誉教授 文学博士  
長原 亘 (考古学)  
千葉市埋蔵文化財調査センター



### 梶原氏の汚名返上

梶原景時公顕彰会 前会長

吉野 淳夫

本年八月に、「千葉氏を語る会」の皆様にご来店をいただきました犬山口レライ麦酒館の吉野と申します。貴会の江波戸氏とは、大学で共に学んだ仲であり、またお互いの結婚式にも招きあつた旧来の友人です。

さて、夏の郡上八幡の旅の目的が、八百年前の千葉氏に関わることだと伺い、事前に江波戸氏より千葉氏の資料を送つて頂きました。すると山内一豊の妻、千代は千葉氏から分かれた東氏の出身であることを知りとても興奮を覚ええました。

なぜなら、一豊の母である法秀院は犬山市の羽黒梶原氏の出身であり、千葉氏と梶原氏とは関わりがあることが分かったからです。源頼朝の家臣であった梶原景時は、頼朝の死後、鎌倉から追放され西国に向かう途中の清水で討たれ、景時公の孫にあたる豊丸は、乳母の里である犬山市羽黒へ落ち延びました。その際に豊丸公をお守りして共に落ち延びた七家臣が我が家の先祖であるとされています。菩提寺である興禅寺

は、景時公の開基であり、寺の近隣には宇治川の先陣争いで有名な名馬磨墨を祀る塚があります。昭和六十二年に、興禅寺を中心として梶原景時公顕彰会を設立することとなり、初代の会長を務めさせていただきました。

ご任職の人望もあり三百人ものが集まり、名誉会長には当時の岐阜県副知事であった梶原拓氏に就いていただきました。毎年五月には梶原公の供養祭である梶原忌が行われ、これまで三十三年間続けて参りました。

景時公終焉の地である清水の梶原会、梶原屋敷があつた寒川町の顕彰会、郡上八幡市明宝の磨墨顕彰会をはじめ、東京、山梨、九州から梶原家末裔の方々、さらには歴史研究家、郷土史家まで、毎回百名前後の方々にお集まりをいただいています。

梶原氏は千葉氏とは異なり、歴史の表舞台からは姿を消したにも関わらず、後世には「ゲジゲジの梶原」や「讒言者梶原」などの悪名のみが伝えられてきました。これは家臣の末裔としては非常に耐えがたい屈辱でもありました。しかし顕彰会のごままでの活動の中で、このイメージを払拭できたことはなにより誇らしいことです。

名誉会長の梶原拓氏は、毎年発行する会報誌「かじわら」に欠かさず寄稿くださり、梶原忌に可能な限り御出席頂き、会の指針を示してくださいました。

「景時公は政権の横奪を狙う北条一族にとつて大きな邪魔者であつたわけで頼朝の側近たちのお互いの疑念不信、反目を誘い遂には源氏の直系を根絶やしにしてしまつた」と、決めつけられ、こうした「曲げ伝えられた歴史からの正当な復権」を、我が会の指針とし、歴史の再評価を強く願つておられました。

そしてもう一人、梶原復権の強力な後ろ盾となつたのが、梶原の末裔であり甲府で弁護士をされている梶原等氏です。彼は弁護士活動の傍ら、景時公に関する歴史資料を調査し、捻じ曲げられた景時像を洗い出し、文武両道に秀でた景時像を浮き彫りにし、『知られざる鎌倉本髓の武士 梶原景時』を出版されました。

その中で、鎌倉時代に天台宗の座主を四度も努めた慈円は、仏教界の最高位にあつた人であり、また鎌倉一の文化人でもあつた人物ですが、「景時公は鎌倉本髓の武士である」と評価していたと著書の中で紹介しています。

このように高い評価を得ていた景時公が、なぜこれほどまでに悪人として

後世に伝えられたのでしうか。景時公を「ゲジゲジ虫」と決めつけたのは、江戸時代に近松門左衛門が歌舞伎の戯作で創作した言葉だと言われています。

判官鼻肩の歌舞伎の世界で、大衆に受けを狙つた悪名だつたのです。もう一人悪名作りに加担したのが、大正時代に『義経伝』という小説を描いた黒板勝美氏です。黒板氏は幼いころより義経ファンであり、「景時は頼朝に取り入る奸佞なる人物で心がねじけて人に媚びつらう悪い奴だ」と決めつけています。また、反景時論の背景には戦前の時代を支配した皇国史感があり、義経は後白河法皇の味方であつたので、これに対抗する頼朝と景時は非国民のレッテルを貼られたと考えられます。こうして江戸から大正にかけて景時公の悪人像が作り上げられたのです。

平成十四年に小説家の永井路子氏の大山での講演を拝聴いたしました。永井氏は立身出世した人物には興味がなく、景時公の悪人ぶりに魅力を感じ、調べていくうちに、義経をはじめ多くの御家人を失脚させたのは、鎌倉体制からはみ出しそうな人間を容赦なく始末することによって、武家体制を作り上げたのだという結論に至つたと、景時公を高く評価されていました。

さらに頼朝は座りのよい操り人形であり、真に時代を背負つたのは東国武士団であつたとも述べておられました。

令和となつた今年、千葉氏と梶原氏のご縁を感じる事ができ、非常に嬉しく感じております。

来年は五月二十四日に梶原忌を開催する予定です。もし貴会からのご参加がいただけるならば、八百年の歴史口マンを共に感じられるのではないでしうか。ご参加をお待ちしております。最後となりましたが、貴会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

梶原景時の像



## 房総武田氏の興亡

会員 日向安昭

武田信長とは

武田信長は甲斐武田家と先祖を同じくする。

上総武田氏の系図：武田信長の子供以下の確かな系図は残っていません。今回は通説の系図で説明します。

なぜ甲斐の武田氏が房総に来たのか（一四五六）年）武田氏十代武田信満の次男信長が康生二年（一四五六年）古河公方足利成氏の命を受けて 上総に侵入し、真里谷城、庁南城を築いた。信長は房総武田の祖と言われている。

### 時代背景

関東の動乱のきっかけとなった最初の争乱上杉禅秀の乱（一四一六年）が起きる。甲斐の武田信満は、姻戚関係にあった上杉氏憲に味方し、一族をひきいて鎌倉に馳せ参じた。信長はこのとき、兄の信重とともに父に従った。武田信満は上杉禅秀に味方したため、足利持氏（鎌倉公方）の追討を受けて十賊山において敗死すると、信長はこの（鎌倉公方）の追討を受けて十賊山において敗死す

ると、甲斐は無主状態となり、逸見氏、穴山氏、跡部氏ら有力国人勢力の台頭を招き国内は争乱状態に陥っていた。信長は父から後事を託され、武田氏の一族である信濃守護小笠原政康を頼って信濃へ逃げこんだと思われる。

信長は信濃国において、武田氏の実権を甲斐国に回復しなければならぬと考え、やがて単身帰国した。（府馬氏の見解）

武田信長はゲリラ的夜襲戦などによって逸見氏を攻撃し始めたのである。

信長が甲斐国内であれば回つていとの報を受けた鎌倉公方足利持氏は、大軍をひきいて信濃に攻めこむ。信長は猿橋付近の戦いで敗れ、鎌倉へつれられていった。鎌倉を脱出し、再び甲斐へ帰った。

その後永享の乱（一四三八年）、結城合戦（一四四〇年）が起きるが、武田信長や信高はそのころ京にいて、第八代將軍義政に仕えていたらしいが、おそらく義政將軍に願ひ出て、鎌倉に下り、成氏に仕えることになったと思われる。（府馬氏の見解）享徳の乱（一四五五年）が勃発、武田信長は、成氏の命で上総の国に侵入した。（一四五六年）武田信長が房総に来る前に武田氏の一族の所領があったと言われている。南北朝期に上総姉崎や市原郡に所領を有してい

た。（「戦国の房総と北条氏」黒田基樹著者）また下総について武田七郎三郎資嗣なる者が上総の在地領主・村上式部大夫入道源清とともに遵行使（守護使）を勤めている（『尊経閣文』）。武田信長の上総国入部は、これら旧来の上総に所領を有した武田氏の存在の根拠。

信長は房総の武田氏の安泰をはかり、その発展を考え城を築城した。富里城（君津市久留里字安住小字上城）、佐是城（市原市佐是字岳城）、峰上城（富津市中郷字要害）を築き、久留里城には信長の三男信房（一説に武走）を、佐是城には孫の国信を、峰上城にはやはり孫の信武を配置したといわれる。その時期は一四六九、一四九二年にかけてであったと推定される。（府馬清氏の見解）

真里谷氏は後に、さらに次の六城を築いた。佐貫城（富津市佐貫亀沢山）、大多喜城（夷隅郡大多喜町泉水）、造海城（富津市竹岡字城山）、笹子城（木更津市笹子字笹子谷）、中尾城（同市中尾）、椎津城（市原市椎津字外郭）。

その時期は一四九二、一五九〇年にかけてであろう。（府馬清氏の見解）信長七七歳（一四七七年）で病死。信長が死んで三年後に信高が

なくなる。

これ以降約三〇年間一五〇三年頃まで、上総の国では一部を除いて戦乱がなかつたと思われる。（新編房総戦国史千野原氏の見解）

武田信勝は小弓に足利義明を呼ぶ。後義明は小弓公方と呼ばれる。

その後真里谷一族は後継者問題等で内紛が起きる。北条氏綱は房総進出を図るために、内紛を利用して上総に進出する。また北条は真里谷と足利義明の仲を裂く策略をめぐらす。徐々に上総武田氏は弱体していった。

第一次国府台合戦では、武田一族はまとまっていなかつたため満足な戦いではできなかつた。第二次国府台合戦では里見軍に従軍したが敗れる。

小田原城合戦では、真里谷信隆や武田豊信らも小田原へ兵を送ったが、戦つたとの記録はない。真里谷城主信隆は、下総国に落ち延び那須家に身を寄せた。

上総武田氏は房総の戦国期に、一時代を築く前に一族の内紛で力を発揮することができなかつた。

頼朝の死亡時期における

『吾妻鏡』の謎

会員 山内博

頼朝の死は古来ナゾとされている。

『吾妻鏡』には、頼朝が死んだ正治元年（一一九九）の部分に欠けているからである。それから十三年後の建暦二年（一二二二）の同書には、橋の補修に関する記事があり、そこに「去る建久九年、相模の有力御家人の稻毛重成は妻の死を弔つて相模川に架橋した。その橋供養に臨席した頼朝は帰路落馬し、いくばくもなく死去した」とある。

なお、この橋の脚が関東大震災の際、砂の液化化現象により、そのうちの九本が姿を現わし、茅ヶ崎市にあるその遺構はいま国の史跡に指定されて保存されている。

このことから、頼朝が橋供養に出席したと、帰路落馬し、しばらくして死んだことは事実と見て誤りないと思われる。頼朝の死去は、当時の文書によつて幾らか分かるが、不思議なことに彼と親交のあった九条兼実の日記「玉葉」には、一度この部分が欠けている。朝の死因について、『明月記』では「頓病（急死）」とする

も詳しくは触れておらず、『愚管抄』に至つては、たんに

「所労（病氣）」としか記していないが、近衛家実の日記には正月一八日条にのどがかわき尿の通じない飲水の病氣「すなわち糖尿病による」と見えている。

『吾妻鏡』は北条執権下の幕府関係者の手で編纂されたものである。

しかし現存するテキストはとびとびに合計十年ほどの部分が存在しない。欠落の理由としては、(a)なんとなく書かなかつた (b)意識的に書かなかつた (c)書いたけれども散佚してしまつた (d)書いたけれども破棄してしまつたなどがあるが、(b)意識的に書かなかつたおよび(d)書いたけれども故意に破棄してしまつたというのが在りそうなことである。

なぜそうしたかその理由が問題になるが、『吾妻鏡』の執筆者たちの基本的な態度、あるいは執筆にさいしての基本的な方針は北条氏にとつて都合の悪いことは書かない、あるいは書いたとしても胡魔化して書く、さらには北条氏の都合のためには嘘までも吐くということである。

この時期は鎌倉幕府にとつて重大な問題が集中していた。とくに北条氏が頼家・実朝に対しての事柄から『吾妻

鏡』の叙述は微妙な配慮がたえず働いていたように思われ、頼朝の死をかくむ重要な時期については関係者の意見調整が困難で、ついに叙述が完成しなかつた可能性は大きい。

頼朝の死の前の三年間の欠大部分の歴史を見ると、それは京都における頼朝派の代表九条兼実の失脚、反頼朝派の急先鋒源通親の権力掌握によつて、頼朝が対朝廷政策で大きく後退を余儀なくされた時期である。

また頼朝の死後、後継將軍頼家の訴訟親裁が有力御家人たちの反発によつて停止され、將軍の専制政治への不満が急速に高まつた時期でもある。

そうした政治危機の中で、北条氏は政局の主導権を握るため、頼朝の死の前後の短い期間に大胆な行動をとつたかもしれない。

頼朝の死の謎は、死因そのものよりも、むしろその前後の、隠された政治の舞台裏に興味を惹かれる。

編集後記 編集子

大変遅くなりましたが、会報第九号をお送りします。今後共皆様の意見も得られるように会の運営を進めて参りたいと思います。ご協力お願い致します。

千葉氏を語る会  
ホームページのアドレスはこちら

<http://chibaujikataru.sakura.ne.jp/index>

GOOGLE, YAHOO の検索で‘千葉氏を語る会’と検索すると千葉氏を語る会ホームページ が検索されます。千葉氏を語る会の活動・事業内容を表示しています。千葉氏の歴史を学ぼう。積極的に参加してください。